

小学校社会科歴史分野における絵画資料の活用を軸  
とした単元開発と実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加納, 慶士 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024842">https://doi.org/10.14945/00024842</a>

# 小学校社会科歴史分野における 絵画資料の活用を軸とした単元開発と実践

加納 慶士

Design and Implementation of an Elementary School History Unit Using Visual Materials  
Keishi KANO

## 1 問題の所在と研究の目的

社会科歴史分野の問題点として、「暗記科目」という認識が子どもたちの中にあり、覚えて終わりという学習に留まり、切実性を伴う学習になっていないという問題が指摘されている。宮城（2016）は、社会科は暗記科目であるという認識が社会科を苦手、嫌いにしている大きな要因の1つであると述べている。

子どもが切実性をもって学べるようにするための手立てとして、資料の提示には大きな可能性がある。加藤・澤井（2017）は地図や年表、図表などの資料から情報を読み取ることの重視性を指摘するとともに、資料を必要な場面で視点を意識して提示することや、比較・分類・総合・関連付けといった資料の活用のしかたを工夫することが大切であると述べている。北（2016）も社会科の授業においては、資料から社会的な具体的事実を読み取り、それらをもとに社会的事象の意味を考えさせることが重要であると述べている。このように社会科においては資料を活用することは必須であり、その資料の選択や活用方法、提示の仕方に留意した授業を計画していくことが求められている。

一方、歴史学習の資料には、他の社会科にはない年表や絵画といった資料がある。新学習指導要領の社会科では、新たに「年表や絵画など資料の特性に留意した読み取り方についても指導すること。」という文言が加わった。歴史学習において、絵画資料を活用した先行実践を調べたところ、絵画資料の活用は、学習課題の設定（中妻，2007）や、学習課題に対して自分の考えを持つための視点を育んだり（田中，2012）、さらには子どもたちが学習内容を理解するための手立てとなったりしていること（小林，1996）（倉持，1996）が明らかとなった。若杉（2002）は、絵画資料には、生徒自らの問題意識を育てて、その疑問をテーマとして授業を展開するという極めて主体的な歴史学習を引き出す可能性を持っていると述べている。

しかし、ただ絵画資料を提示しても効果的な学習になるとは限らない。北（2016）は、資料を見る視点をしっかり提示して、それにもとづいてより分析的に読み取らせることによって、資料そのものをより深く読み取ることができるようになると述べており、絵画資料を提示する際において、視点を提示することの有効性を指摘している。しかし、絵画を活用した歴史学習において、視点を提示したことによる効果を検討した実践は多くない。そこで、本研究の歴史授業においては絵画資料を効果的に活用した授業を展開することで、子どもたちに自分事として歴史学習に主体的に取り組ませるとともに、資料を見る視点を与えることによって子どもたちの歴史理解を促進したいと考えた。

本研究は、小学校6年生社会科歴史分野における絵画資料の活用に着目した単元開発及び授業

実践を通して、その成果と課題を分析していくことを目的とする。絵画資料を選択する際に、絵画資料から単元の目標に到達できるものであることや、子どもの興味や関心を引き付けられること等に留意した。また、資料を読み取らせる時に、資料を見る視点をしっかり提示して、それにもとづいてより深く資料の読み取りをさせることに留意して研究を進めた。

## 2 研究の方法

本研究では、筆者が行った小学校社会科の2つの単元を分析対象とする。実践Ⅰ「武士の政治が始まる（鎌倉時代）」を6年1組（全7時間）、2組（全6時間）の2学級で実践した。実践Ⅱでは、6年1組において「幕府の政治と人々の暮らし（江戸時代）」（全9時間）の単元を実践した。

実践Ⅰでは、2学級において授業を実践したため、先行学級（2組）の授業実践を通しての自己省察と学級担任からの指摘によって得られた課題を整理し、後行学級（1組）では改善した授業を実践した。実践Ⅰ実践Ⅱともに授業後の自己省察と学級担任からの指摘を踏まえて授業のデザインを行った。毎時間の授業実践と撮影した毎時間のビデオ記録や児童のワークシートなどの結果から、絵画資料の読み取り場面を設けた授業の有効性を分析していく。

## 3 授業実践及び考察

### 3-1 実践Ⅰ「武士の政治が始まる」（鎌倉時代）

#### 3-1-1 活用した絵画資料

実践Ⅰで扱う鎌倉時代の目標は、新学習指導要領に以下のように記されている。

源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いを手掛かりに、武士による政治が始まったことを理解すること。

鎌倉時代は、武士による政治が始まる歴史的に大きな変化のある時代である。この目標に迫るために実践Ⅰでは、表1の絵画資料を取り上げた。

表1 実践Ⅰ指導過程と活用した絵画資料

時	1組（後行学級）「」活用した絵画資料	2組（先行学級）「」活用した絵画資料
1	6/14（水）「貴族の屋敷」と「武士の館」の想像図からの読み取り	6/9（金）「武士の館」からの読み取り
2	6/16（金）「平治物語絵巻」からの読み取り	6/12（月）「平治物語絵巻」からの読み取り
3	6/19（月）源平合戦	6/14（水）源平合戦
4	6/21（水）鎌倉幕府の成立	6/19（月）鎌倉幕府の成立
5	6/23（金）「蒙古襲来絵詞」からの読み取り	6/21（水）「蒙古襲来絵詞」からの読み取り
6	6/26（月）元寇と幕府の衰退	6/23（金）鎌倉幕府に点数を付けよう
7	6/28（水）鎌倉幕府に点数を付けよう	なし

実践 I で活用した絵画資料を取り上げた意図を以下に述べる。第 1 時では、「武士の館の想像図」(図 1) と「貴族の屋敷の想像図」(図 2) を取り上げた。これら絵画資料には、建物に注目すると、敷地の中心に大きな母屋があり、周りに小さな建物が描かれている。建物の造りもかやぶき屋根であり、質素な印象がある。人々に注目すると、流鏑馬や剣、弓矢等武術の稽古をしている姿が目につく。子どもたちは、武士と言えばそのようなイメージを持っているため、そこに違和感はないだろう。しかし、その一方では畑を耕したり、田植えをしたりして農業をしている姿が描かれている。当時の武士が武術の稽古をするだけではなく、農業もしていたということにも気付くことができる。周りの環境に注目すると、敷地を柵で囲み、見張り台があり、さらに堀があり、戦いに備えている様子も読み取ることができる。想像図はイラストであるため、両者の特徴が分かりやすく描かれており、貴族と武士の生活を対比して読み取らせることで当時の武士の具体的な様子を正確に把握することができると思う。

第 2 時で活用した「平治物語絵巻」(図 3) に描かれている平治の乱は、貴族の政治から武士の世の中へと移り変わる大きな出来事だと言える。貴族の屋敷に武士たちが襲いかかっていることが読み取れる。それは、燃えている建物は貴族の屋敷の特徴である寝殿造りであり、描かれている人々の服装や持ち物を見ると貴族と武士であることが分かるからである。

第 5 時で活用した「蒙古襲来絵詞」(図 4) には、鎌倉時代の後期に起きた元寇の様子が描かれている。鎌倉時代の武士たちにとって大変大きな出来事であった元寇について学習する上で、この資料が有効である点は、日本と元軍の戦い方の違いや武器の違い等が克明に描かれており、人や馬、武器、武具などの描写も正確で記録画としての性格を顕著に示し、特に当時の戦闘武装の様子を伝える史料としても重要であるからである。そのため、日本と元の戦いの様子を比べながらじっくり見ていくことで、子どもたちが正確に状況をつかむことができ、元寇についての学習が深まると考えた。

### 3-1-2 視点の提示とその効果

第 1 時では、「武士ってどんな人?」という学習課題を設定し、武士の館の想像図(図 1) の読み取りを行った。資料を見る視点として、①建物②人③館の周囲の環境という順に事実を読み取らせた。先行学級では、貴族の屋敷の読み取りが不十分で、比較してみるのが十分行われな



図 1 武士の館の想像図(教育出版小学社会 6 上)



図 2 貴族の屋敷の想像図(教育出版小学社会 6 上)



図 3 「平治物語絵巻」(ボストン美術館蔵)



図 4 「蒙古襲来絵詞」(教育出版小学社会 6 上)

った。そのため、後行学級の授業では貴族の屋敷と武士の館を同時に注目させ、両者を比較して共通点と相違点を見つける中で「武士ってどんな人？」という課題に迫っていった。貴族の暮らしと武士の暮らしを比較しながら資料を読み取らせるとによって、両者の違いに気付き、授業前の武士のイメージに比べ、当時の武士についてより具体的に学習することができた。

第2時では、「平治物語絵巻」(図3)の読み取りを行った。ここでも第1時と同じく資料を見る視点として建物、人、周りの環境に注目させた。先行学級では、建物の造りや人の様子、服装、持ち物から資料に描かれている場面を読み取ることができていたが、後行学級では、一般的な記述や発言が多くあり、人の様子の読み取りはできていても、武士や貴族としての様子の読み取りはできていなかった。それは、この絵画資料の良さと活用することの効果について十分な理解ができていなかったためだと考えられる。

第5時では、「蒙古襲来絵詞」(図4)の読み取りを行った。ここでは、資料を見る視点として人の持ち物や戦いの様子に注目させた。先行学級、後行学級ともに、どちらが日本軍でどちらが元軍か見分けが付いた。そこから、さらに当時の人々にとって恐ろしい出来事であったこと、元軍が様々な国から軍を集めていたこと等の理解につながる可能性を感じた。

### 3-2 実践Ⅱ「幕府の政治と人々の暮らし」(江戸時代)

#### 3-2-1 活用した絵画資料

実践Ⅱで扱う江戸時代は、新学習指導要領に以下のように記されている。

江戸幕府の始まり、参勤交代や鎖国などの幕府の政策、身分制を手掛かりに、武士による政治が安定したことを理解すること。

表2 実践Ⅱ指導過程と活用した絵画資料

時	日時	○学習内容 「活用した絵画資料
1	8/30(水)	○「加賀藩大名行列図屏風」からの読み取り
2	9/1(金)	○参勤交代 「加賀藩大名行列図屏風」
3	9/4(月)	○大名配置 「將軍に挨拶する大名たち」
4	9/6(水)	○武家諸法度
5	9/11(月)	○鎖国 「長崎の出島」「島原・天草一揆」
6	9/13(水)	○鎖国のもとでの交流 「朝鮮通信使江戸市中行列図」
7	9/15(金)	○身分制度 「土農工商図屏風」
8	9/20(水)	○身分制度 「土農工商図屏風」
9	9/22(金)	○3つの政策を順位付けしよう

この単元では、江戸幕府による大名統制、外交統制、身分制度の3つを通して、なぜ江戸幕府は約260年間も続いたのかということ学習することとした。実践Ⅱでは、単元を通して絵画資料を位置付け、授業において活用した。(表2)

実践Ⅱの第1時では、大きな勢力を持っていた加賀藩の「加賀藩大名行列図屏風」を活用した。この絵画資料を取り上げた意図は、江戸時代の大名に対する政策を学ぶ上で、参勤交代による大

名行列は大変印象的だからである。この「加賀藩大名行列図屏風」には、様々なものが描かれている。ここから表面的に読みとれることは、大人数で列をなして歩いていること、様々な服装でそれぞれ持ち物を持っており、大がかりな行列だったこと等である。しかし、それらに加えて、この参勤交代にかかった費用や日数、参加した人数等の情報を提示すれば、何のためにこのようなことをしたのかという疑問が生まれると考えた。その他、表2に載っている絵画資料についても、子どもたちの視覚に訴えるため、子どもたちがより当時の様子を認識し、把握するためにも活用する価値が高いのではないかと考えた。

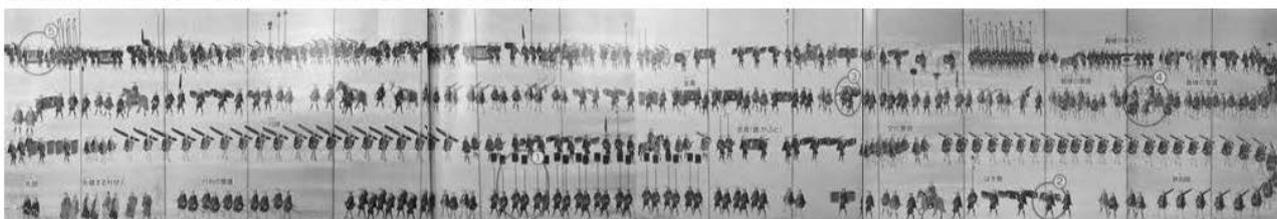


図5 「加賀藩大名行列図屏風」 資料集（小学校6年生）

### 3-2-2 視点の提示とその効果

第1時で活用した「加賀藩大名行列図屏風」では、まず人と持ち物に着目して資料を見ていくように指導したところ、子どもたちは行列の長さ気付き、そして人と持ち物を見ると服装や役割、持っているものの違いを発見した。そこで、この行列は、参勤交代という制度であるということをおさえ、参勤交代にかかった日数や費用の資料を提示すると、子どもたちの中かなぜ、わざわざ時間とお金をかけてこのようなことをする必要があるのかという疑問が生まれた。「えらい人に呼び出された。」という意見から、なぜ江戸幕府は参勤交代をさせたのだろう。」という学習課題につながった。子どもたちは、大名は大金を使ったことや1年おきに行っていたこと、妻や子供を人質にされていること等を知り、幕府は大名が逆らえないように強い力で支配していたことが分かった。

## 4 総合考察

本研究では、小学校社会科において、子どもたちの生活と歴史事象との距離を縮めるための手立てとして絵画資料の活用に着目した単元開発とその実践を行った。

2つの実践の結果、絵画資料を活用することで、子どもたちが歴史事象を単なる暗記の対象としてではなく、身近に捉え、自分事として考えることができるという手応えを得た。例えば、実践Ⅱ「加賀藩大名行列図屏風」の読み取りを行った第2時の振り返りの中では、「もし私が大名だったとしても、昔の大名と同じ行動をしていたかもしれません。」「江戸幕府はひどいと思います。自分が大名の立場になったら逆らえないけど超むかつくと思いました。」と自分事として捉えている子どもの記述が多く見られた。これは、子どもたちの生活と歴史事象の距離を縮めるための手立てとして、絵画資料の活用価値が高いという可能性を示している。

絵画資料を活用することによって子どもたちが身近に感じ、自分事として考えるために有効であった要因を、他の資料と比較しながら考察する。絵画資料活用の利点の1つ目としては、絵画資料は描かれている情報を視覚的に把握しやすいという点が挙げられる。子どもたちが興味を持ちやすく、資料の読み取りに技能差が生まれにくく、同じスタートラインに立って学習を始めら

れることや、絵画資料に描かれている当時の様子を身近に感じられることは、学習内容を自分事として捉えるための大きな要因となるだろう。

2つ目としては、絵画はその読み取らせ方によって多くの発見や疑問のある資料であるという点である。例えば、描かれている表面的な事象を読み取らせるだけではなく、その背景や意味を考えさせることで、より深い理解へ導くことができる。実践Ⅱにおける「加賀藩大名行列図屏風」を活用した実践は、絵画資料を活用することが、子どもたちに学習内容を自分事として捉えさせるだけではなく、学習目標に直結した深い学びをさせるのに有益であるといえるだろう。

しかし、単に絵画資料を活用すれば効果的な学習になるという訳では勿論ない。どのような資料をどのように提示するのかという活用方法に留意しなければいけない。本実践では、絵画資料を活用する際、子どもたちに視点を提示して読み取りを行わせた。以下、その点について考察する。視点を提示することの効果の1つ目は、絵画資料に描かれているものを効率的に読み取ることができたという点である。単に「気付いたこと」を発表させると発表に時間がかかったり、視点が拡散したりしてしまうが、例えば、「建物」「人」「周囲の環境」という視点を与えることで、話し合いを焦点化できる。このことから、絵画資料に描かれている全体像から、絵画のどこに注目するかという視点を与えることが大事であると言える。

視点を与えることの効果の2つ目として、視点を与えることにより、複数の情報を関連付けて検討できるようになるという点が挙げられる。例えば、実践Ⅰでは貴族の屋敷と武士の館を提示する際に2つの絵画資料を提示し、貴族の屋敷と武士の館を比較しながら読み取らせることで、その両者の特徴が明確になるように活用することができた。

しかし、学習効果の高い絵画資料読み取りの視点を子どもたちに提示するためには、どの資料がより活用価値が高いのか吟味し、その資料からどのようなことを子どもたちに学ばせたいのかを教師自身が正確に把握した上で、活用することが重要となる。今回の実践では絵画資料を見る視点を子どもたちに与えていたが、教師が意図的、継続的に絵画資料を活用していくことで、子どもたちが絵画資料の読み取りに慣れ、絵画資料のどこを見たら良さそうかという見方が育まれ、子どもたちがより深い読み取りを主体的に行っていくことにつながっていくと感じた。

最後に本実践では十分に検討できなかったが、絵画を活用して歴史学習を行う上での課題について述べる。まず、本実践においては、教科書や資料集に掲載されている有名な絵画資料を活用したが、授業で活用可能な絵画資料を増やしていくことが挙げられる。また、絵画資料を提示する際に視聴覚機器を効果的に活用したり、実物の大きさが感じられるようなレプリカを活用したりして、より効果的な絵画資料の提示方法や活用方法を探っていくことも必要であろう。さらに、今回は、比較・分類・総合・関連付けといった学習の仕方については十分な工夫を施すことができていなかった。複数の絵画資料を活用したり、絵画資料だけではなく、文献資料を含む教科書の記述等を関連付けたりしながら、子どもたちの歴史理解を広く、深いものにすることが次の実践への課題である。

#### 主要参考文献

- ・北俊夫・向山行雄『アクティブ・ラーニングでつくる新しい社会科授業』学芸みらい社（2016）
- ・澤井陽介『社会科の授業デザイン』東洋館出版社（2015）
- ・澤井陽介・加藤寿朗『見方・考え方〔社会科編〕』東洋館出版社（2017）